

『地域研究のためのフィールド活用型現地教育』

平成 21 年度派遣報告書

インド共和国・発展社会研究所、マラーティー語、2009 年 12 月 19 日－2010 年 3 月 19 日

平成 19 年度入学

大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

博士課程 3 回生 飯田玲子

自身の研究テーマについて

報告者の調査対象であるタマーシャー劇は、16 世紀から 17 世紀に成立したとされる民俗芸能である。英国による植民地期には、独立運動を喧伝するための手段としてタマーシャー劇が用いられた。また、反ブラーマン運動のプロパガンダとしても、タマーシャー劇が用いられたという記録が残っている。その理由は、インド古典演劇論である「ナーティヤ・シャストラ」等には則らず、恋愛劇やコメディなど、いわゆる世俗的な演目をおこなってきたことや、タマーシャー劇の担い手達がコルハーティー(Kolhāti)とよばれる、「その他後進諸階級」の人々や、マハール(Mahar)やマタン(Matang)といった指定カーストの人々で構成されていることも挙げられる。また、舞踊のパートを担う女性達が、売春業にも従事してきたことなども関係して、田舎の小作男性農民しか鑑賞しない低俗な芸能として捉えられてきた。

しかし近年（特に 2000 年以降）都市部を中心に、タマーシャー劇の再評価および興隆の動きが出てきている。こうした、タマーシャー劇の現代的な変容を、どのように捉えることができるのか？ということが、報告者の研究テーマである。既に述べたように、タマーシャー劇はセクシュアリティの問題とも深く関わってきたため、現地の人には内情を語らないことが多く、助手や通訳を介した調査は困難である。今後も継続的に研究してゆくにあたって、マラーティー語の習得は必須事項である。



【地図：マハーラーシュトラ州、青い部分がプネー県】

研修言語の概要

インドには、公式に 18 の公用語が存在する。実際にインドの紙幣には、どの地域の人でも使えるように、18 の言葉で書かれている（写真 1）。報告者が研修をおこなったマラーティー語は、インドの西部マハーラーシュトラ州で話されている言語である。マハーラーシュトラ州自体が 1961 年の言語による州分割によって生まれた州であり、マラーティー語の話者は 7000 万人とも言われている。ペルシャ語やアラビア語の影響を受けた言葉も多いが、サンスクリットに起源を持つ言葉である。地方では、方言が用いられており、北西部ではグジャラーティー（グジャラート州の言葉）、北東部ではヒンディー（インド北部の言葉）、南部ではカンナディー（カルナータカ州の言葉）の影響を受けた方言が話されている。報告者の主要調査地は都市部であるため、語学研修では標準マラーティー語を学んだ。

マラーティー語では、ヒンディー語と同じデーヴァナガリー文字を使用しているが、マラーティー語

特有の ऌ [La]が存在している。その為、マラーティー語には日本語で対応するところの、「ラ」の音が3つ存在 (ल [la]と र [ra]) しており、慣れるまでの間は、発音や聞き取りに時間がかかった。また、ヒンディー語には男性名詞・女性名詞が存在するのに対し、マラーティー語には男性・女性名詞に加えて、中性名詞というものがある存在している。

語学研修の内容

滞在中は週に5回、月曜日から金曜日までは、プネー駅の近くにお住まいの Meena Skhutankar 先生から個人授業を受けた。Meena 先生は、マラーティー語を教えるのは初めてだとおっしゃっていたが、とにかく親身に丁寧に授業をしてくださった。1回の授業時間は2時間だが、報告者が理解できていない箇所については、授業時間が過ぎても丁寧に教えて頂くことが多かった。また、週3回、月曜日から水曜日までプネーのファーガソンカレッジにて、朝8:20から朝9:10まで、マラーティー語の詩のクラスを聴講した。

語学研修期間中は、午前中は授業の予習をおこない、授業後には IC レコーダーで録音した授業内容を繰り返し聞きながら、復習をおこなった。土曜日と日曜日は、報告者の調査対象の人々のところへ赴いたり、大学図書館や書店に赴き文献資料の収集をおこなった。

授業の内容は、タマーシャの調査に役立つようなことを多く教えて頂いた。特に親族関係や出身地に関連する項目に関しては、じっくりと時間をかけて授業をして頂いた。また、ファーガソンカレッジでの授業では、マハーラーシュトラ州の農村の詩を授業で取り上げてくださり、授業後に教員からエッセンスについて教えて頂くことも多かった。



【写真2: Meena 先生と報告者】



【写真3:ファーガソンカレッジ】

研修期間中に印象に残った経験や体験

滞在中に新聞を読んでいると、「ムンバイのタクシー運転手に、マラーティー語の試験を受けさせるべき。」というある政党の主張が出ていた。ムンバイやプネーには、他州からの（特に、北部ウッタル・プラデーシュ州やビハール州）出稼ぎの人が多く存在していて、タクシー運転手やリクシャー運転手の仕事をしている。確かに、滞在中に報告者も多く出稼ぎの人に出会った。そして、お客の行きたい目的地がどこだか分からないという運転手にも多く出会ったが、マラーティー語話者のほとんどがヒンディー語を解するので、生活には殆ど支障はない。しかし、雇用機会を他州の人間に奪われるという考えから、言語によってよそ者を排除しようという動きがみられるのも事実だ。

また、現地に到着してから数日滞在していたムンバイのホテルで従業員の青年と話をしている、「何をしにインドに来たのか？」と問われ、「マラーティー語を勉強しにきた。」と伝えたところ、彼は「ヒンディー語がインドで一番力を持っているんだ！マラーティー語なんて、この辺でしか使えないん

だ！」と激怒した。彼もインド北部ウッタル・プラデーシュ州からの出稼ぎであった。

言語による自由もあれば、言語による不自由もある。どの言葉を使うのかということは、生きてゆくことと密接に関係している様子を、目の当たりにした出来事であった。

目的の達成度や反省点

ミーナ先生をはじめ、現地の皆さん（滞在先の家族はもちろん、街中の人々や、マラーティー語話者のリクシャー運転手さんなど）が積極的に報告者にマラーティー語を教えてくださいました。渡航前よりも格段にマラーティー語会話が上達した。また、新聞のヘッドラインを毎朝読むようにとのご指導を頂いて実践したところ、文章読解の力も大きく身についた。宿題として、A4 の用紙に 1 枚程度自由に文章を書いてくるというものも出された。宿題は、授業の前に先生に添削して頂いて、もっとニュアンスが出る表現や、言い回しなどをその場で指導して頂いた。慣れるまでは、辞書をひくのにも一苦勞で、辞書とのにらめっこが続いたが、品詞の活用や時制が身につくにつれ、単語の原型が見え始め、辞書をひく時間も短縮され、書く力も大きく身についた。

言語上達の道として現地の方に言われたことは、「とにかく沢山話して、沢山聞いて、沢山書く」ということだ。報告者はこれにプラスして、「模倣する」ということも頻繁におこなった。耳に入ってきた言葉を、同じリズムで同じトーンで再現すると、ただ文字を読んで発声するよりも格段に相手に通じることが多く、非常に勉強になった。今後の課題は、4 ヶ月後の次回の長期フィールドワークの間までに、日本でも毎日マラーティー語の勉強をおこなう必要があるということである。現地の皆さんの熱心かつ温かいご指導の下、マラーティー語が上達したので、この力を維持・向上してゆきたいと思う。私のつたないマラーティー語に耳を傾けてくださり、そして適宜直してくれたプネーの皆様、本当にありがとうございました。

最後に、今年度から初めてインドが ITP 派遣対象国となった。日本での学習が困難なマラーティー語を、現地で集中的に学ぶことができたことは、報告者にとって大変貴重な財産となった。インドへの派遣に尽力して下さった諸先生方に、厚く御礼申し上げたい。